

史 跡 福 山 城 XIII

平成7年度 発掘調査概要報告

1996・3

北海道松前町教育委員会

序

史跡福山城は、安政元年に完成した最後の日本式築城による城郭であり、三ノ丸に7座の台場を有す、我が国唯一の城郭であります。この城の保存管理については、文化庁・北海道の補助により昭和50年度に保存管理計画を策定し、環境整備に係わる遺構確認調査は昭和55年度以来実施し、今年度は第13次を数えるに至りました。これと同時に石垣の復元工事も進み、とりわけ外堀周辺は、徐々に城郭の姿を取り戻しつつあります。

さて、今年度は、昨年度より続く史跡福山城南東部二ノ丸・三ノ丸地域の発掘調査を実施いたしました。その結果、隅櫓、東郭土居石垣、三ノ丸石垣、五番台場などの遺構が確認されました。とりわけ、搦手門裏東郭の隅櫓と土居石垣の位置が明確になったことで、この一帯の遺構がほぼ明確となったところであります。今後、この史跡南東部地域の環境整備に向けて、ますます意を強くしているところであります。

つきましては、これらの成果をもとに、史跡福山城が一日も早くいにしえに復することを願ってやみません。ここに平成7年度の発掘調査概要報告書を刊行するにあたり、本書がより多くの方々に活用されることを期待いたしております。

最後に、この事業を遂行するうえで、文化庁、北海道教育委員会をはじめ、関係機関、諸先生がたに多大の御指導御助言をいただき深く感謝を申し上げる次第であります。

平成8年3月

松前町教育委員会

教育長 柳 田 由 孝

例 言

1. 本書は、平成7年度に松前町が実施した史跡福山城環境整備事業に伴う遺構確認調査の概要を報告するものである。
2. 本調査は、平成7年6月から平成8年3月までの間、次の体制で実施した。
調査主体者：松前町教育委員会 教育長 柳田由孝
調査担当者・調査員： 調査係長 前田正憲
調査事務局：松前町教育委員会文化財課
調査作業員：上原行雄、酒井 徹、赤松順子、浅見千恵子、石井トメ、石戸礼子、石山すみ子、河田敬子、川村恵子、川村房子、斉藤秋子、斎藤雅子、坂本麗子、佐藤伸子、佐藤美恵子、中山千恵子、福井榮子、松川笑美、三浦久子、三浦文子、室田園子、柳沢洋子、和田映子、
3. 本書の編集、執筆、写真撮影は前田があたった。
4. 遺構実測図の整理・トレースは赤松があたった。
5. 遺物実測図の作成・トレースは川村、河田、斎藤、中山、松川、三浦、和田があたった。
6. 調査期間中、次の諸機関各位から御指導御助言をいただいた。
(敬称略、類不同)
文化庁記念物課：田中哲雄・本中 眞・増淵 徹、奈良国立文化財研究所：加藤允彦、北海道教育庁文化課：伊藤敏彦、昭和女子大学：平井 聖、神戸芸術工科大学：近藤公夫、元国立史料館：浅井潤子、東京大学：渡辺達三、札幌学院大学：桑原真人、札幌市立高等専門学校：大宮昭芳、東北芸術工科大学：仲野 浩、北海道開拓記念館、佐賀県立九州陶磁文化館、有田町教育委員会、愛知県陶磁資料館、瀬戸市歴史民俗資料館、瀬戸市埋蔵文化財センター
7. 調査に関する諸記録、資料は松前町教育委員会が保管する。

目 次

序	i	・基壇周辺土居	7
例言	iii	・基壇西側暗渠	8
目次・挿図目次	iv	2) 隔槽廻り	9
図版目次	v	・隔槽	9
I はじめに	1	・石段	13
1. 調査の経緯	1	・橋、暗渠	13
2. 調査の目的と成果	1	・福山館期遺構	17
3. 調査の方法	3	3) 東郭石垣	18
II 調査結果	5	4) 三ノ丸石垣	21
1. 出土遺構	5	5) 五番台場・四番台場	25
1) 二重太鼓槽廻り	5	6) 遺構小括	27
・二重太鼓槽	5	2. 出土遺物	29
・嘉永以前盛り土	7	写真図版	35

挿 図 目 次

第1図 史跡位置図	vi	第16図 東郭土片詳細セクション図	22
第2図 調査区位置図	2	第17図 三ノ丸石垣平面図	
第3図 遺構配置図	4	・セクション図	23
第4図 二重太鼓槽廻り平面図	6	第18図 台場廻り平面図	24
第5図 槽台基壇トレンチセクション図	7	第19図 五番台場平面図・コンター図	26
第6図 槽台基壇トレンチ遺物出土状況	8	第20図 五番台場セクション図	27
第7図 槽台廻りセクション図	10	第21図 四番台場付近平面図	
第8図 隔槽廻り平面図	11	・セクション図	28
第9図 隔槽廻りセクション図(1)	12	第22図 出土遺物	
第10図 隔槽廻りセクション図		碗・皿類(1~15)	32
・エレベーション図(2)	14	第23図 出土遺物	
第11図 隔槽廻り詳細セクション図	16	皿・鉢類(16~23)	33
第12図 木製橋平面図		第24図 出土遺物	
・エレベーション図	17	徳利他(24~29)	34
第13図 石製橋・暗渠排水詳細図(1)	18	第25図 出土遺物	
第14図 暗渠排水詳細図	19	ガラス・硯他(30~34)	35
第15図 東郭土居平面図・セクション図	20	第26図 出土遺物 鉄製品(35~40)	36

図 版 目 次

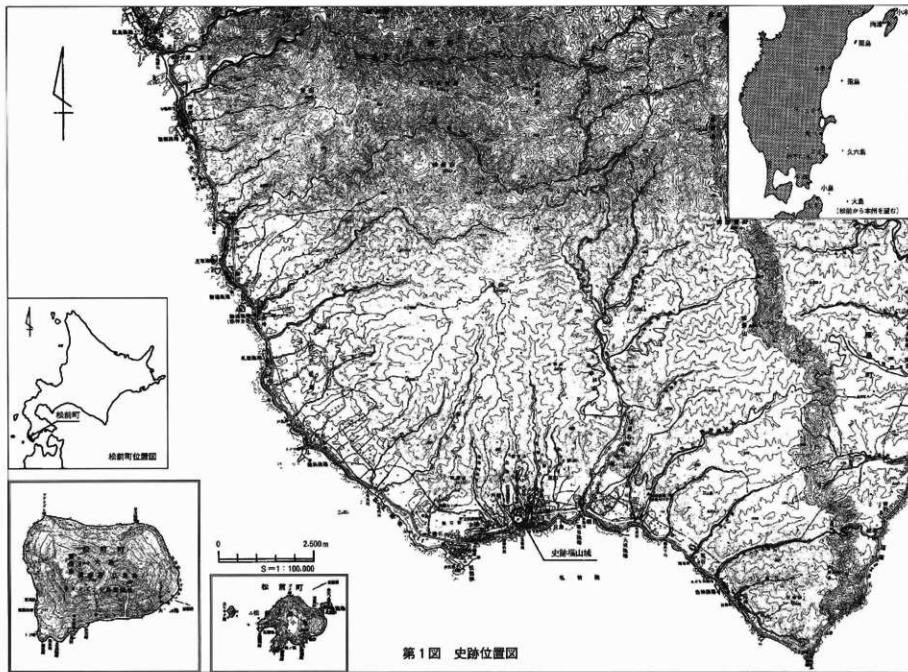
図版 1 二重太鼓櫓基壇 (1) 57	図版14 暗渠と枡 (2) 70
図版 2 二重太鼓櫓基壇 (2) 58	図版15 石製枡 71
図版 3 二重太鼓櫓基壇 (3) 59	図版16 枡・福山館期土居 72
図版 4 二重太鼓櫓基壇 (4) 60	図版17 東郭石垣 (1) 73
図版 5 二重太鼓櫓基壇 (5) 61	図版18 東郭石垣 (2) 74
図版 6 二重太鼓櫓西側土居 (1) 62	図版19 東郭石垣 (3) 75
図版 7 二重太鼓櫓西側土居 (2) 63	図版20 三ノ丸石垣 76
図版 8 二重太鼓櫓西側暗渠 (1) 64	図版21 五番台場 (1) 77
図版 9 二重太鼓櫓西側暗渠 (2) 65	図版22 五番台場 (2) 78
図版10 隅櫓 (1) 66	図版23 出土遺物 (1) 79
図版11 隅櫓 (2) 67	図版24 出土遺物 (2) 80
図版12 隅櫓 (3) 68	図版25 出土遺物 (3) 81
図版13 暗渠と枡 (1) 69	

表 目 次

第 1 表 出土遺物集計表 3	第 2 表 図示遺物観察表 29
-----------------------	------------------------

凡 例

1. 位置図・出土遺構図の縮尺はそれぞれの図表に示した。また、挿図の方位はすべて磁北である。
色刷りマゼンダは福山城以前の福山館期の遺構を示し、シアンはその他を示している。
2. 出土遺物の縮尺は、 $\frac{1}{4}$ 、 $\frac{1}{2}$ 、 $\frac{3}{4}$ 、 $\frac{1}{4}$ 、 $\frac{1}{2}$ である。写真図版の縮尺は不同である。



I はじめに

1. 調査の経緯

史跡福山城の遺構確認調査は、昭和55年度から開始し今回で13回目を数える。これまでの調査により種々の遺構の位置・構造が以下のように明らかになってきた。

年 度	調査地点	確 認 遺 構	調査面積
昭和55年度	試掘12箇所	内堀・外堀	146㎡
昭和58年度	本丸	内堀・空壕	270㎡
昭和59年度	本丸	内堀・空壕	850㎡
昭和60年度	本丸	本丸表御殿	188㎡
昭和61年度	本丸	搦手門・御多門	170㎡
昭和62年度	本丸	本丸表御殿・排水溝	880㎡
昭和63年度	本丸	本丸表御殿・西堀石垣・排水溝	1,500㎡
平成元年度	本丸	本丸表御殿・西堀石垣・西土手・西門跡 御導場跡・地下蔵様遺構・空壕跡・外堀	1,800㎡
平成2年度	本丸	南西隅櫓・枕列・井戸・外堀	300㎡
平成3年度	三ノ丸東部	石垣・外堀・馬坂周辺石垣	200㎡
平成4年度	三ノ丸東部	外堀・馬坂門・橋・御鉄砲置所・御番所・ 七番御台場・土居・東部石垣・枕列・側溝・水路跡溝跡	1,980㎡
平成5年度	三ノ丸東部	外堀・三本松土居・天神坂門	1,172㎡
平成6年度	二ノ丸東部	二重太鼓櫓・土蔵・土居・搦手門	1,600㎡
平成7年度	東郭・二ノ丸 三ノ丸東部	二重太鼓櫓・隅櫓・四番・五番台場・東郭土居、 三ノ丸土居	1,095㎡

以上のように各年度の調査を終え、これまでに本丸及び本丸周辺の主要遺構を調査し、史跡福山城南東部にあたる、三ノ丸から二ノ丸にかけての遺構を集中的に調査しており、整備により次第に姿を現してきている。平成6年度の史跡整備検討委員会で、二ノ丸・三ノ丸の集中調査を計画し、史跡福山城の南東側全域の遺構を明らかにし、この地区の整備に資することになった。この指導のもとに文化庁・北海道教育委員会と協議のうえ、平成7年度の調査を実施したものである。

2. 調査の目的と成果

今年度の調査は、昨年度の史跡整備検討委員会で御指導いただいた二ノ丸・三ノ丸地域の、二重太鼓櫓・隅櫓・東郭土居石垣・三ノ丸土居石垣・四番五番台場を対象に、整備復元するための基礎的データを得るための遺構確認調査を行った。そのなかには、二重太鼓櫓・隅櫓の位置と櫓台高の確認や、昨年度に引き続き外堀二ノ丸側土居土端の把握、その他土居遺構の確認などの目的があった。調査地域は東郭・二ノ丸南東部・三ノ丸台場の遺構が予想される地域を調査対象とした。調査確認された遺構は以下のとおりである。

- 1) 太鼓櫓 全面調査
- 2) 隅 櫓 全面調査
- 3) 五番台場 全面調査
- 4) 各土居
・東郭土居石垣 全面調査



第2図 調査区位置図

0 100m

・二ノ丸土居 全面調査

・三ノ丸土居石垣 全面調査

今年度の調査により、それぞれの壇高、各土居の部分的な土居高、各道路・平場の路盤高などが確認できた。それと共にこれら遺構のプラン・規模も明確となった。これらの遺構の位置や規模・構造が明確になったことにより、絵図との照合が昨年よりさらに広域的に可能となった。また、各標高が明らかになったことにより、慶応3年に撮影された福山城の写真を比較して、撮影された各遺構の総体のレベル関係や、遺構の立面規模までも推定が可能となったことが、今回の最大の成果である。

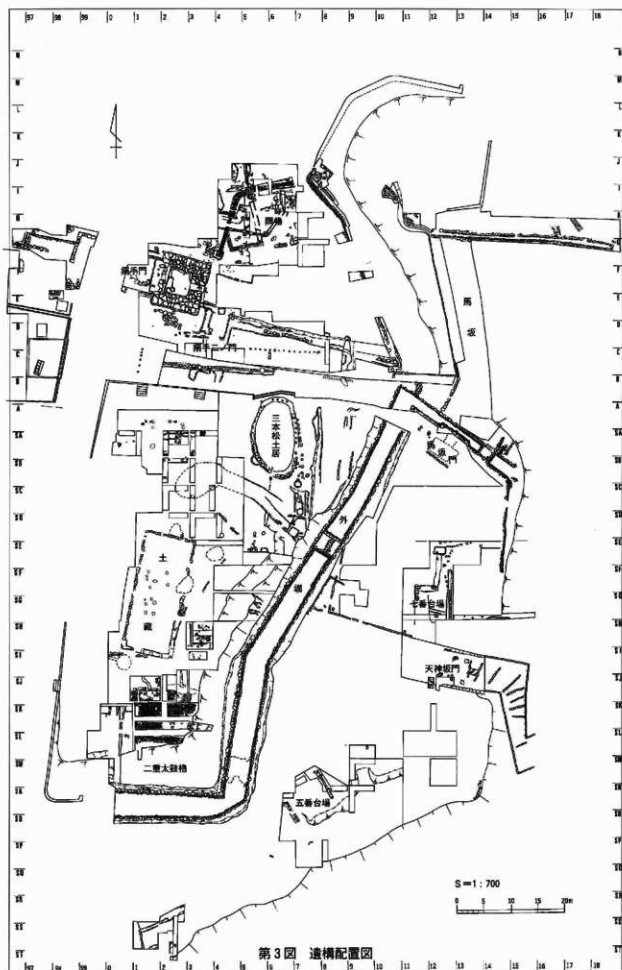
3. 調査の方法

本年度の発掘調査区は、昨年度の発掘調査区に隣接しており従前の調査区の呼称を継承して使用し、整合性を図っている。出土した遺物は、各層位ごとに取り上げ、遺構については、平面図・断面図・立面図等を必要に応じて作成した。

本年度の発掘調査は6月10日から、本格的な調査にかかった。遺構調査は、まず二重太鼓櫓廻りを調査し、次に東郭の隅櫓部に堆積する近代住宅の廃材や、駐車場として使用されていたことから、大量に堆積する砂利などを、深さ約0.3m程をバックホーにより除去し、その下位を人力で調査した段階で隅櫓基壇縁石が出土した。東郭土居石垣については、土居遺構が残存している可能性があるため、重機による掘削は行わず、すべて人力で行った。調査に係わる土砂の排出には、ベルトコンベアー2台を使用した。三ノ丸土居石垣調査で、石垣全体が現われ、土嚢で全体を保護した。最後に台場の調査を行い、6月10日から開始した調査は11月3日に終了した。整理作業は3月まで行った。

陶磁器類 11,341点					
磁器 4,633点	碗類	2,457点	陶器 3,337点	碗類	168点
	皿類	1,547点		皿類	424点
	鉢類	200点		鉢類	301点
	徳利類	172点		徳利類	370点
	その他	240点		甕類	572点
表採および石垣裏込め砂利混入陶磁器		3,371点	石製品 20点	壺類	230点
				播鉢	257点
				その他	1,115点
				硯	6点
				砥石	14点
瓦		84点	土器 石器		
ガラス		15点			
木製品		1点			
金属製品		535点			
その他		41点			
総出土点数 12,865			816点		
			12点		

第1表 出土遺物集計表



第3図 遺構配置図

Ⅱ 調査結果

1. 出土遺構（第3図）

今年度の調査区から出土した遺構は、以下のとおりである。

○福山城期（安政元年完成～明治8年取り壊し）

二重太鼓櫓（天端・土居・暗渠）

隅櫓（基壇・緑石・枳・暗渠）

東郭石垣（根石・根掘り）

三ノ丸石垣（天端・土居）

五番台場（根石・根掘り）

○福山館期（慶長11年完成～嘉永2年）

土居（根掘り・栗石）

以上のおもだった遺構が発見された。以下、各地区毎に述べる。

1) 二重太鼓櫓廻り（第4～7図）

（図：掘り下げ地業、基壇天端高、土居天端高、嘉永以前暗渠）

○抄録

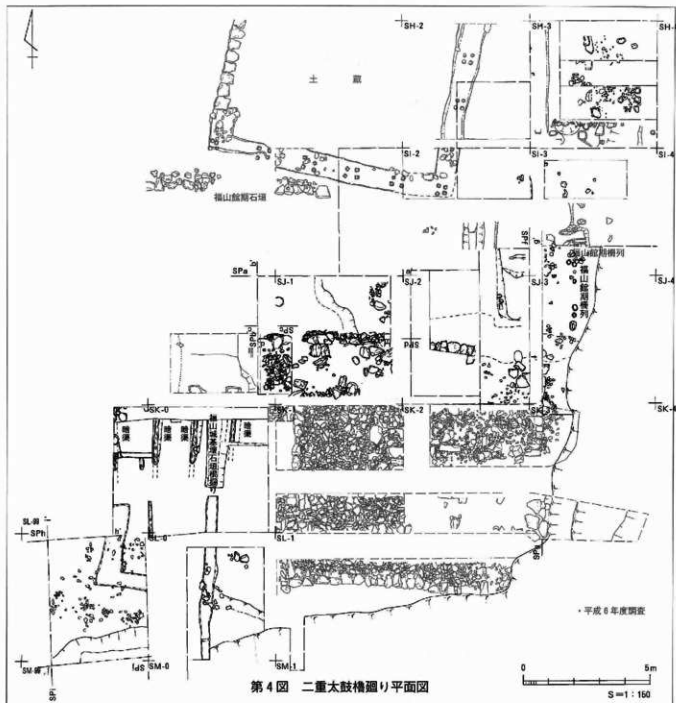
昨年度に引き続き調査を行った結果、基壇天端高が標高20.40m以上で、基壇北側土居天端高も標高20.25m付近であることが上層観察により判明した。SJ-1Gridでは、嘉永以前の盛り土の調査を行った結果、曲物や漆器、17世紀から18世紀代の陶磁器が出土した。また、基壇西側には、ほぼ4尺間隔に南北方向に埋設された嘉永以前の暗渠を4本発見した。基壇西側の土居天端は特定できなかった。

・二重太鼓櫓

昨年度の調査で二重太鼓櫓の基壇地業が、嘉永以前の盛り土をローム地山まで掘り込み、敷石と粘土を4～5尺、そして砂利と粘土を2～3尺積み重ね基壇を構築していることがトレンチ調査で判った。そこで今年は基壇の天端高を確認することと、基壇周辺の土居との関連を確認する作業に重点を置いた。以下、二重太鼓櫓周辺の調査部位について、プランとセクションをそれぞれ述べることにする。

基壇平面図：第4図色刷りが昨年度調査した遺構部分である。今年度の調査によって、基壇下層部地業の敷石の北東隅が出土した。これにより四隅のうち、南東隅を除き三方の隅が判明した。その掘り込み地業下層部の、敷石上面の平面規模は南北31尺で東西32尺である。また、基壇の向きは軸が磁北よりやや東に偏している。

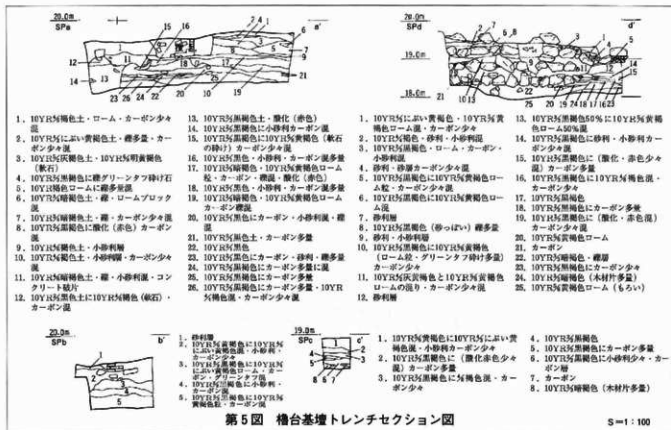
基壇セクション図：第5図のSPd-d'は、基壇下層部地業の側面である。このセクションでは、福山城築城時に嘉永以前の盛り土を地山ローム面まで掘り下げ、土層22で地山面を水平に均し、土層22の上面から礫を積み上げている状況が判る。



第4図 二重太鼓櫓廻り平面図

第4図の平面図中SJ-4Gridに基壇上層部地業の天端付近に、構造物土台根石と思われるグリーンタフの平石を発見した。この平石上場のレベルは標高20.39mであった。基壇遺構の残存部は、ここが最も標高が高く、この部位以外では遺構が存在していない。したがってこの平石上場高を、予想される基壇天端高の下限とした。この平石付近のセクションを第7図SPf-f'とSPg-g'に示した。平石の位置はSPf-f'では土層4)中で、平石の下位は調査していないのでセクションは表せない。しかし、その表面をSPg-g'で表すことができ、それは土層3)の位置にあたる。この上層は城取り壊し時に土層3)まで削平された後、土層3,4)を盛土している可能性がある。

また、SPg-g'のSL-3Point付近に基壇下部地業の敷石と粘土を積み上げている。大型礫とローンを交互に積んでいる状況が判る。土層13,14,19~23)は、基壇上部



第5図 槽台基壇トレンチセクション図

S=1:100

地層の、砂とロームを版築している状況が判る。

・嘉永以前盛り土

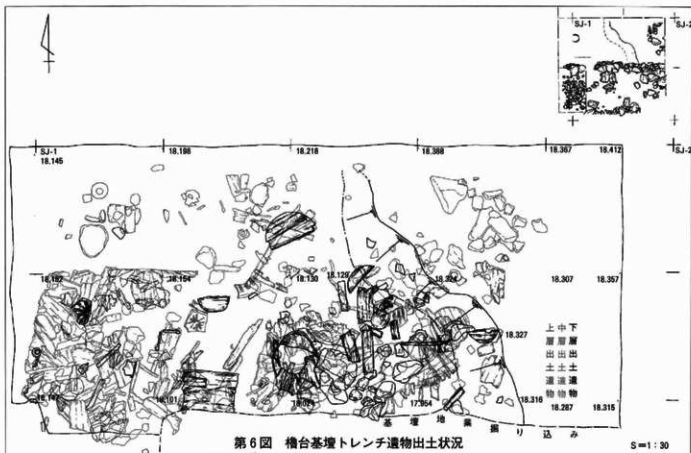
槽台の基礎地層周辺の嘉永以前盛り土部、SJ-1Gridの調査を行い、盛り土堆積状況を調査した。この調査で、木製遺物とともに、主として17～18世紀までの陶磁器が出土した。

土層の堆積状況を第5図SPa-a'に示す。土層1,11)が近代の掘乱で、土層2～8)が嘉永年間築城時の盛り土で、土層9)以下が17世紀後半から嘉永以前までの盛り土である。また、土層12～14)の掘り込みは築城以前の可能性が高い。

遺物の出土状況を第6図に示した。陶磁器の種類は、碗、皿、搦鉢、大鉢などがある。木製品については、曲物がおおく、径は1尺5寸のものが多く出土した。差物の漆塗の破片や、黒漆塗碗も少量出土した。また、カバ類の樹皮や、桎が多数に出土していた。木製品は保存状態が悪く、比較的保存状態の良いものについては10～20%のメタノール液に漬けて保存している。

・基壇周辺土居

二重太鼓槽基壇北側と西側の土居高の確認を目的とした、部分的な平面調査を行った。槽北側のSH-3～SK-3Gridにかけて調査を行った結果、SJ-3, SK-3にかけて福山館期の横列の跡と思われる柱穴列を発見した。また、この3ラインのセクションの観察によって、土居の天端高が判ると共に、土居勾配も部分的に推定できるようになった。さらに、槽西側SM-99, SM-0Gridを調査したが、土居天端を特定できなかった。この西側地区の調査では、福山館期の建物土台根掘りが部分的に発見された。



第6図 機台基壇トレンチ遺物出土状況

S=1:30

基壇北側土居：第7図のSPf-f'とSPg-g'に土居の土層堆積状況が判る。SPf-f'の土層8,9)の上面と、SPg-g'土層1~5)以下の土層上面のうち、土層26)の上面が基壇北側土居天端と思われる。標高は20.25mまでは確認できる。土層36~38)までは福山館期の堆積土であり、土層36)は横列の確認面でもある。また、土層の堆積が、北側から南側に傾斜して堆積している状況から、北側から南側に盛りたして、この土居を形成したことが判る。基壇地業とのつながりを観察すると、基壇下層部地業の敷石を積み終えた後、土居をつなげ基壇上部の地業を行っていることが判る。したがって構築順序は、基壇下層部地業→土居→上層部地業の順となる。SPe-e'には基壇上部他業の版築状況がセクション中央部に表われている。

基壇西側土居：第9図のSPI-I'にある土層23)以下が福山館期の土居盛り土である。土層19~22)は、築城時に堆積したもので、土層19)より上位は、明治8年に降に堆積したと思われる。天端は確認できなかったが、土層23)の上面よりさほど高くない位置(標高で19.6mを大きく出ない位置)に天端があるのかも知れない。

このことと、この部分の土居の外堀との距離と、セクションに認められる土居の法の勾配との関係から、法面はあまり崩れずに残っている可能性が考えられる。また、土層29,34~37)と土層39,42~44)の境は断層面で、炭化物が含まれている土層が堆積していることから、福山館期中頃にこの断層が生じたものと思われる。

・基壇西側暗渠

昨年度部分的に調査した暗渠の埋設状況についてさらに範囲を広げ調査し、これによって、暗渠の内々ではほぼ4尺間隔(芯々で5尺)に、南北方向に4本の暗渠を発見した。暗渠の埋設された時期は、土層観察から嘉永築城以前と思われる。

暗渠は、板材を箱形に組んだものである。蓋は原形をほとんどとめておらず、側板は部分的に残存していた。底板はほぼ完全に残っており底板の幅はほぼ1尺である。4本の暗渠の底板埋設レベルは18.2~18.3mであり、ほぼ一定の深さで埋設されていることが判る。なお、勾配が判らず排水方向は不明である。

2) 隅槽廻り

(E.W.: 慶応3年写真、二重槽、大壁、桁行四間、梁間三間、土台石垣高、暗渠、石裂橋、福山館期土居根掘り)

○抄録

隅槽は、東郭の南西隅、搦手門の西側に位置する槽で、建物土台石垣の一部を発見した。石垣の規模は、桁行が石垣下場間で26尺、梁間はその根掘りから約19尺と考えられる。慶応3年の写真では二層の大壁である。また、隅槽に沿って、西側から北側に流れる暗渠排水遺構が確認された。さらに、隅槽土台石垣の西隣に嘉永以前の土居根掘りが確認された。

・隅槽

隅槽は、搦手門からつながっている東郭土居上にあり、東郭の南東隅に位置する。今回の調査の目的は、搦手門裏平場と隅槽・東郭土居との平面関係と立面関係、そしてそれぞれの規模・構造を確認することにあった。

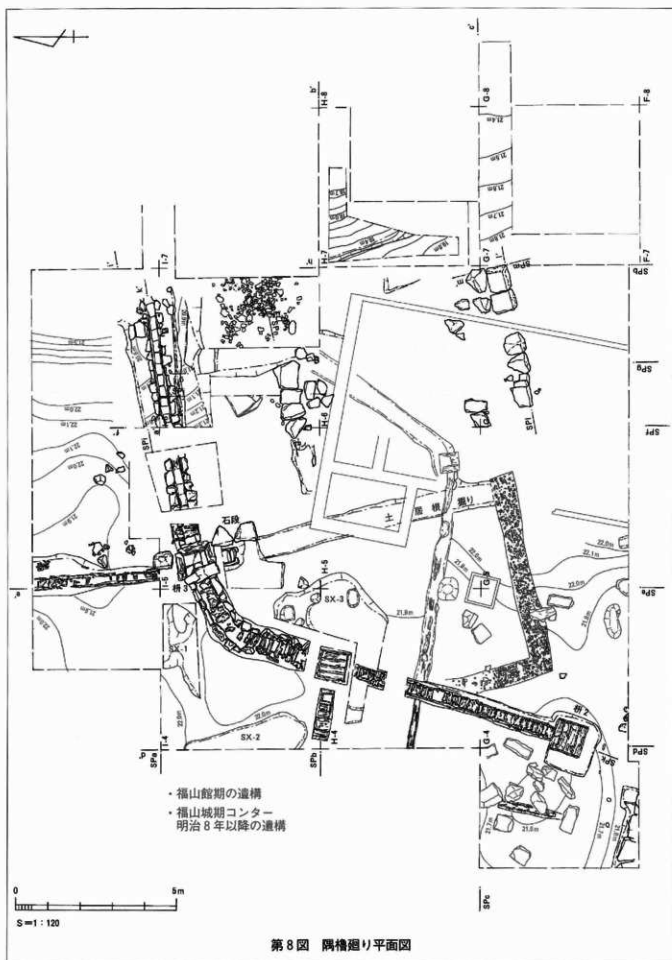
槽土台石垣：この土台石垣の残存状況は、南東隅から南面の石垣の一部と、北面石垣の一部とその根掘りが発見された。これによって土台規模が桁行26尺、梁間約19尺と考えられる。また、土台石の据付けは、根掘りを行うが非常に浅く、石垣と根掘り底面との間に、梁石をほとんど挟まず底面に直接置かれていた。

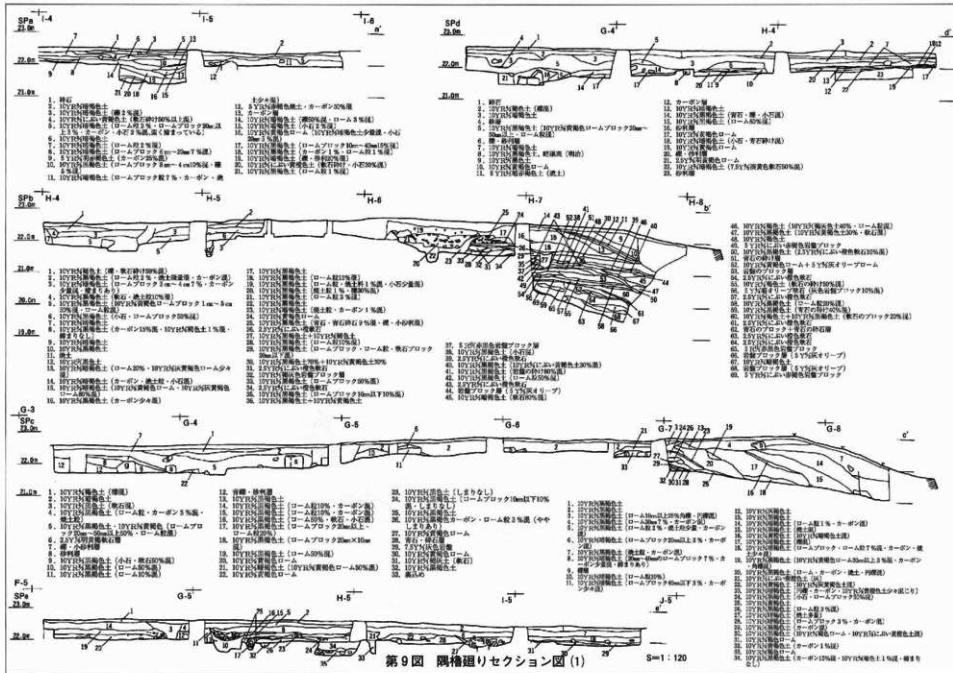
土台石垣は、土蔵土台石や土居石垣と同じグリーンタフを用い、松前町内神明の沢産（福山城東側を流れる大松前川上流）で、面がほぼ2尺の大きさのものを積み上げている。なお、槽中央部は明治8年取り壊し以降、小学校教員住宅などで攪乱を受けていた。

土居堆積状況：槽土台石垣を含む隅槽の土居堆積状況を述べる。

第9図 SPc-c'では、G-7Point付近の土層26)あたりに土台石垣がのる。槽周辺の土層1~14)は近代の盛り土と思われるが、土層2, 6, 10, 11)は基壇および土居内の土砂であった可能性が考えられる。また、石垣の面の観察から、表面の仕上げのはつり調整跡のレベルが22.65mまで確認できたので、槽基壇周辺の地表面レベルはこれを大きくずれない位置が考えられる。そして、土居天端標高については、G-7~G-8Pointの間に土層14~17)までの上面水平部は、標高が22.1m前後であるので、これは明治8年城取り壊し時に削平されたものと考えられる。

第10図 SPf-f'では土層2)の堆積する凹みは、槽基壇の縁石抜き取り跡と考えられ、この土層2)自体は築城時の基壇内の盛り土であろうと思われる。土台石は、





地山ロームにのる。土層12)は雨落ち砂利と思われ、数幅は5尺である。暗渠との新旧関係は、掘り方に堆積する土砂の流れ込みの状態から、築城時に同時に構築され、暗渠を埋設した後、基壇緑石根掘り底にロームを詰め緑石を積み上げたのち、隅槽土台および土台周辺を築造したことが判る。

第10図SPg-g'の土層1~11)は、明治8年城取り壊し以降に構築されたもので、土層16~20)が築城時の槽基壇土台内側の土砂である。また、土層22)は地山ロームで、土層21)は築城以前の堆積土である。土層14)は雨落ち砂利で近代の掘り込みによって切られている。G-6Grid側の土台石垣には、表込め栗石が残っていた。

第10図SPj-j'の土層1,2)は緑石抜き取り後の堆積土で、土層3~5)は暗渠埋設覆土である。土層10)は築城以前の堆積土で、その上位が築城時盛り土である。

・石段

I-5Grid、隅槽の北側、石橋の南に接して石垣風のグリーンタフ2石が出土した。面の幅が1石約2尺5寸で2石合わせて約5尺である。松前神社所蔵絵図によると、この位置に土居に登る階段があり、位置関係および構造から、土居石段の可能性が考えられる。石段石は、ローム地山にのり、面は一部暗渠掘り方の覆土にかかる。

土層堆積状況：石段を含む周辺の土層堆積状況を述べる。

第11図SPa-a'は、石製橋から南へ2尺ほど延びる暗渠にかかる断面図で、石製階段との土層位置関係を示す。土層1)は福山城時代の表土で、ロームを張っている。S Pb-b'は、暗渠の断面との関係を示している。また、SPg-g'は暗渠と石段の側面の暗渠覆土内の土層堆積状況を示す。土層3)の下位にある礫は、石製橋から南へ2尺ほど延びる暗渠で、ここで途切れる。

・枡、暗渠

この地区の調査で、木製枡2基・石製枡1基そして、それをつなぐ木製暗渠と石製暗渠が発見された。枡と暗渠の配置は、搦手門裏の雨水を集める枡2から木製暗渠で枡1につなぎ、枡1は西側の番所側から木製暗渠で排水を取り込んでいる。さらに石製の枡3に石製暗渠で導き、枡3は木製暗渠により北側からの排水と、石段下の雨水を取り込み、かなりの勾配をもって東郭石垣方向に排水される。なお、この吹き出し口は、平成3年度の石垣の発掘調査で確認している(史跡福山城・松城遺跡1989.3)。以下、それぞれの詳細について述べる。

木製枡(第12図)

枡1の規模は、内法で2尺5寸四方、高さは最大で1尺7寸が残存していた。当時の地表面から底板上面までの深さは2尺3寸ほどである。底板の幅はほぼ7寸で、側板はかなりやせているが、残存していた幅は6寸前後で厚さは7分程である。側板には、2方に呑み口、1方に排水口があり、呑み口の大きさは幅が1尺3寸程で高さが4寸前後と思われる。いずれも底板より1寸~1寸5分程高い位置に穿たれる。排水口は、幅が1尺高さが5寸6分~6寸程と思われる。穿たれる位置は底板と同レベルである。底板上面の標高は21.17mである。

枡2の規模は、内法で東西3尺南北2尺9寸である。深さは側板がほとんど残つ

ていないので不明であるが、当時の地表面から底板上面までの深さは1尺7寸ほどである。底板の幅は8寸～9寸で、側板の厚さは1寸6分～2寸程である。なお、柵内部に石垣石が3個入っていた。おそらく城取り壊し時に入り込んだものと思われる。北面のみに排水口がある。底板上面の標高は21.24mである。

板材はいずれも桧材を用いているものと思われる。

石製柵（第13図）

石製柵の規模は、内法で断面規模は東西2尺3寸と南北2尺5寸で、深さは3尺である。切り石の大きさは、長さ3尺から3尺5寸、幅1尺から1尺3寸、厚さ7寸から8寸である。使用された石材はグリーンタフで、石垣石と同様、松前神明の沢産である。側石の三石積まれた最上部は、ひび割れや剥落が著しい。底はグリーンタフの切り石や偏平な礫を敷いている。底板上面の標高は21.07mである。

EPa-a'は柵の東面で石垣外に排水する暗渠が取り付け付く。排出口の大きさは上辺が8寸で下辺が9寸、高さが8寸の台形状を呈している。

EPb-b'は柵の西面で抜き取られた側石が上部に横たわる。長さは3尺である。柵1からの排水の取り入れ口があり、大きさは上辺7寸下辺8寸で高さ6寸の台形状を呈する。側石は最下部の一段目しか残っていない。

EPc-c'は柵の南面で石段下の雨水を排水するための暗渠の取り入れ口があり、大きさは上辺6寸下辺6寸5分で高さ5寸である。最も開口規模が小さい。

EPd-d'は柵の北面で北郭方向からの木製暗渠の排水取り入れ口がある。木製暗渠の断面が見え、底板は幅1尺1寸、側板間の内法は6寸5分で厚さは2寸程である。取り入れ口の大きさは1尺2寸四方である。

暗渠（第8図）

柵2から柵1間の暗渠は、側板・底板・蓋とも木製である。底板・側板は断面が桁目で、蓋は板を渡す。暗渠の長さは22尺で、断面規模は幅の内法が1尺で高さは5寸程と思われる。

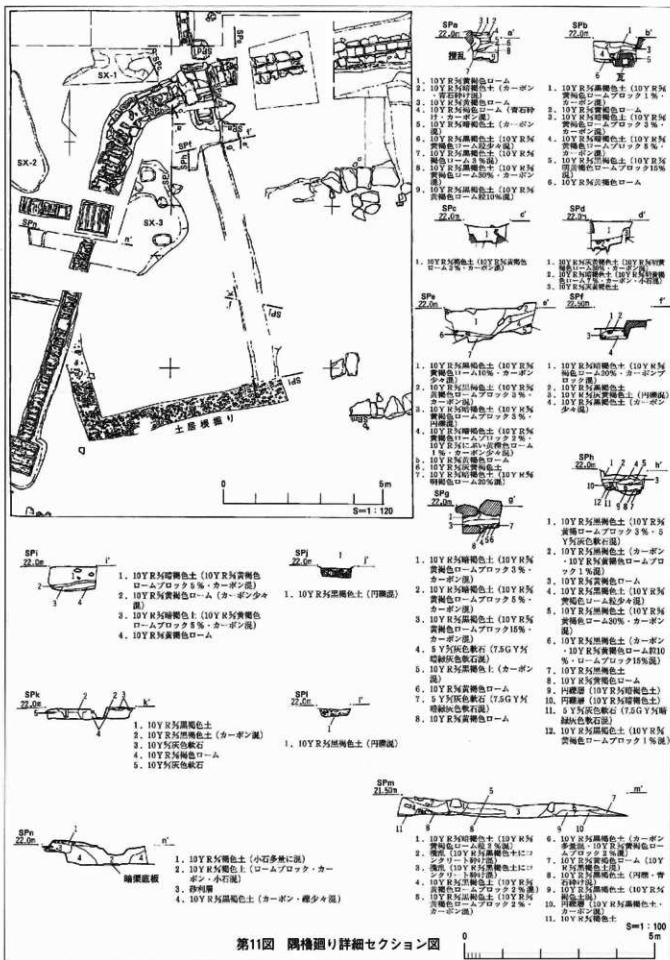
番所からの暗渠も総木製で断面規模は、内法幅が1尺である。

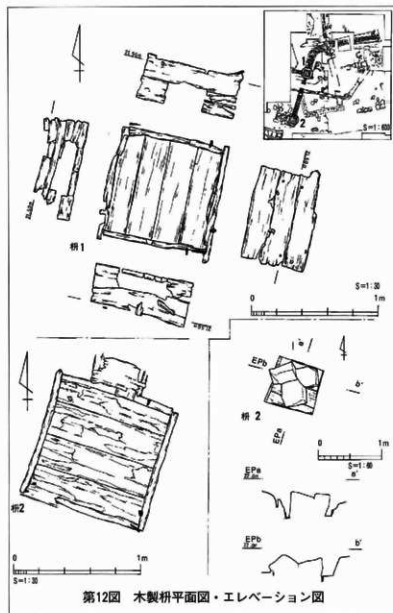
柵1から柵3間の暗渠は底板、蓋が木製で側は石製であるが切り石ではない。暗渠の長さはセンターで16尺あり、側石の内法は柵1側は1尺幅で、柵3側では1尺5寸幅である。第13図にこの柵3側の暗渠の詳細を示した。SPa-a'の断面では底板の幅は1尺5寸で、側石の高さは1尺7寸である。木蓋は本来側石の上面を渡していたが、断面位置（土層1の上面）まで埋没した。

北郭から柵3間の暗渠は総木製で断面規模は内法幅が7寸である。

石段下暗渠は、側石が切り石で蓋は偏平な礫、底は平瓦を3枚敷く。

柵3から東郭石垣間の暗渠は、第14図に詳細を示した。この暗渠は、下部を切り石で組み、上部に木製側板と蓋を被せる。下部の構造は、切り石で排水溝を組み側石の内法幅・深さとも7寸から8寸である。石質は灰色の焼けつ凝灰岩で笏谷石と思われる。上部の構造は側石の外法幅部に側板を置き、側板の内法幅は2尺5寸程と思われる。側板材の幅は8寸程で7寸から8寸おきに船釘が打たれる。第10図SPf-f'のT-6 Grid付近に土層の堆積状況が判る。掘り方は土層3～22が堆積する幅6尺の箱型の溝が最初に掘られ、埋め戻されてから、この暗渠を埋設するために





第12図 木製枘平面図・エレベーション図

再度3尺5寸幅で掘られる。土層3～18)は暗渠の埋土で、暗渠空洞部は陥没していた。

暗渠の勾配を第10図SPk-k'に示した。橋2から橋3にかけて緩やかな勾配だが、橋3から東郭石垣間はかなり急な勾配となっている。

・福山館期遺構

土居根掘り (第8.11図)

H-4.5、G-4.5Gridにまたがって、築城時の地表面である地山ロームの削り出し面に、砂利が2尺から2尺5寸ほどの幅で、コの字形に発見された。築城時に削りだされた地表面で検出され、築城時に構築されたと思われる暗渠に切られていることと、福山城の絵図にも隅隅の脇にこの様な遺構が描かれていないことから築城以前の遺構であろうと思われる。福山館期の絵図に、この付近に土居が描かれていることから、土居根掘りである可能性が高い。

この砂利は非常に浅い箱型の溝(根掘り)に堆積しており、底面は平坦である。第11図SPj-j'とSPi-i'に断面図を示した。この砂利は粒が大きく揃っており、築城時の石垣裏込め砂利とは異なる。

根掘の底面の幅は2尺であり、南北方向の根掘内法間は16尺5寸から17尺で外法は21尺である。土居石垣下場の幅は、19尺から20尺程が考えられ

る。

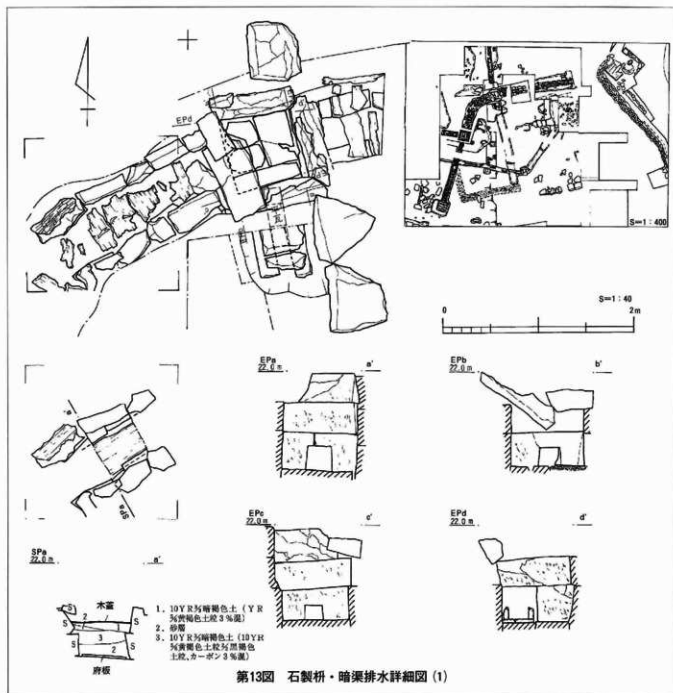
その他の遺構 (第8図)

不定形の掘り込みが3基認められた。時期はいずれも文化・文政以前である。

SX-1はごく一部の調査であるので、遺構の性格はまったく判らない。第9図SPa-a'に覆土の堆積状況を示した。I-4、I-5Point間の土層10)以下の落ち込みがそれで、砂利を多く含む土砂が堆積している。築城時の地表面からの掘り込みの深さは2尺である。出土遺物は無く、短期間に埋め戻されたものと思われる。

SX-2は第9図のSPd-d'に覆土の堆積状況を示した。H-4～d'間の土層20)が築城時の地表面で、覆土には前述の福山館期の土居根掘りに認められたのと同様の砂利が堆積していた。築城時の地表面からの掘り込みの深さは1尺である。出土遺物は無い。

SX-3は第11図のSPn-n'に土居堆積状況を示した。土層2)は暗渠の掘り方で、土層4)が埋土である。土層3)は、福山館期の土居根掘りのつづきで、構築順位はSX-3次に土居根掘り、そして暗渠となる。土層1)は福山城築城時表土である。

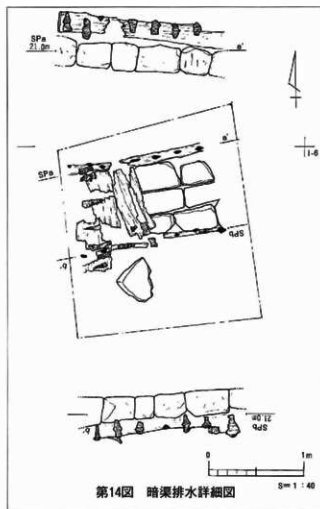


3) 東郭石垣

(ⅩⅩ,南面延長105尺)

○抄録

昨年度のトレンチ調査を踏まえ、未調査部のすべてを調査し終えた。その結果南面の延長は105尺あり、石垣に沿った旧地表面を確認することができた。このことにより、搦手二ノ門石垣角から72尺で旧地表の勾配が変わり、さらに33尺で東郭石垣の東端に達することが判明した。



第14図 暗渠排水詳細図

東郭石垣は、今回の調査ですべての石垣面が明らかとなった。9～10ラインの間は、近代の通路のため削平され、西面にコンクリート石垣が積まれている。

○全体規模構造（第15図）

平面図：D-5GridからD-7Gridまでは、石垣根掘りまでを調査したが、D-8Gridについては石垣抜き取り跡までを調査した。したがって、調査平面図の掘り方の形状が異なる。掘り方を完掘したD-5Gridでは、掘り方底面の幅は2～3尺である。石垣石は、D-5GridからD-7Gridにかけて発見され、C-10Gridでコーナー部分が、またD-10Gridでそれにつづく石垣根石が発見された。いずれも石垣石は築城時地表面下の一段目である根石部分が残っており、二段目が残っていたのはC-6,7Gridの一部である。

また、明治以降の柱穴列も発見された。Epa-a'にエレベーション図を示した。柱穴の間隔はほぼ3尺で深さは旧地表面から1～2尺である。柱穴列は、この柱穴にかかるセクション図SPb-b'によれば、土層13)の擁護壁であった可能性が高い。塀の高さはSPb-b'の土層10～12)の上面と思われる、旧地表から2～3尺程と考えられる。

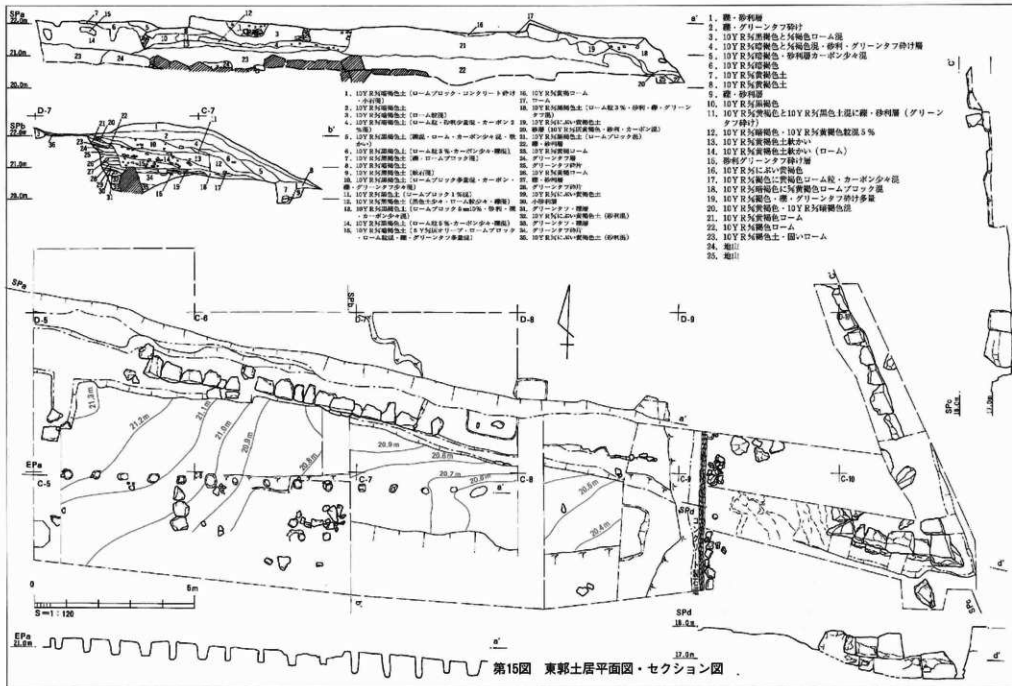
土層図：SPa-a'は、石垣裏込めの土層断面を示している。土層13.14.21～24)は地山ロームで自然堆積土層である。土層1～3)は近代の擾乱で、それ以下土層4～12)は築城時か福山館期か判らない。土層17～19)は築城時の盛り土である可能性がたかい。SPb-b'では7ラインの土層断面を示す。土層20～33)は石垣裏込め砂利で土層34.35)は掘り方の埋土で土層16～19)が築城時から明治8年までの地表面と考えられる。土層10.11.13～15)は明治8年から擁護壁の存続時までで、この時に土層12)が堆積した。

○東郭南東先端部詳細（第16図）

SPa-a'は土層19)の上面が築城時の地表面である。土層30)より下位は地山岩盤である。根掘りの深さは地山岩盤を2尺掘り下げ土層19)までは1尺あり、都合3尺である。自然堆積層が認められないので、築城時に、崖地を地山岩盤まで削平し石垣を築いていることが判る。なお、セクション面に認められる大型の礫は城取り壊し時に落ちた石垣石である。

SPb-b'は土層16)が岩盤面で石垣根掘りの掘り方向が見えている。福山城時代の地表面は、土層10～14)のうちにあり、築城時の地表面は土層14)上面で、根掘り底までの深さは3尺である。8.9)は、城取り壊し時の堆積で、石垣裏込め砂利である。土層1～7)は、コンクリート製石垣を構築しこの部分を通路として岩盤まで削平した後、堆積した土砂である。

SPc-c'は掘り方内部の堆積状況である。大型の石垣石の剥片を多量に栗石として混入した土砂である。石垣根石は岩盤上にある。この部分の岩盤の根掘りの深さは



第15図 東郭土居平面図・セクション図

1尺5寸である。

SPd-d'も掘り方内部の土層堆積状況である。根石第1石までは石垣石の剥片が詰められて2石目には粘土混じりの土を叩き締めている。岩盤の根掘りの深さは2尺5寸である。

SPe~h'築城時の地表面は土層18.23.28)の上面である。城取り壊し時の堆積土は土層9.20.21)で、石垣裏込め砂利も堆積している。福山城時代の堆積土は土層11~15.17)で、土層11)が堆積する以前に何らかの造成がなされたことが、土層12~15)が切られていることで判る。土層16)は岩盤の掘り上げ土で、岩盤の掘り込みの深さは1尺である。

4) 三ノ丸石垣

(XV.延長57尺、石積高6尺)

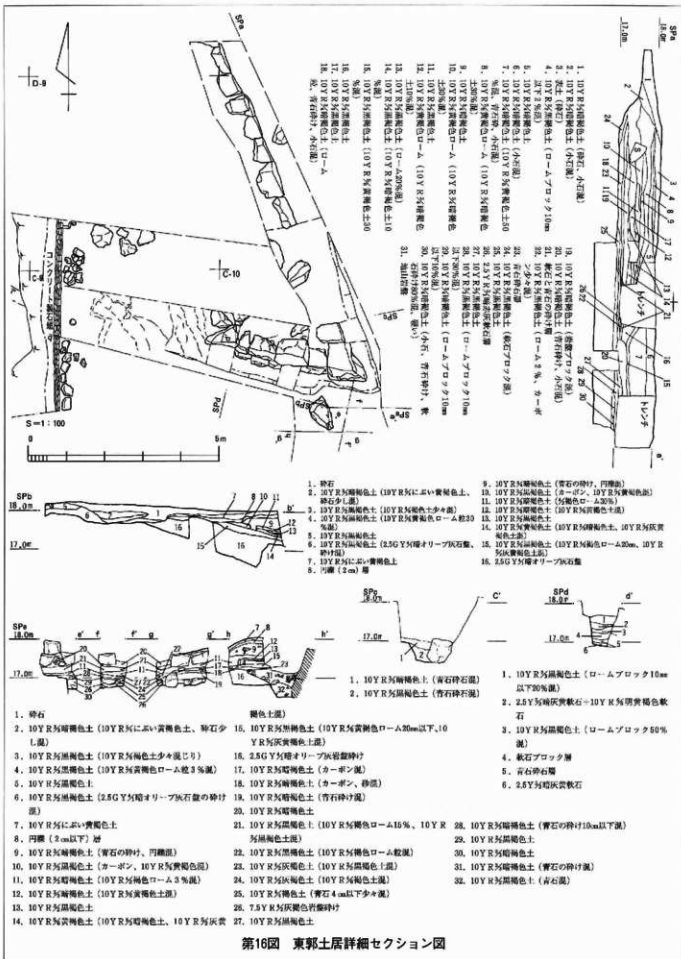
○抄録

松前神社所蔵の線図では、外堀の水を大松前川へ落とす、落とし口の石垣と、この三ノ丸石垣とは接続しておらず、三ノ丸石垣を長さ50尺で描いている。この図の線を延長させると57尺で三ノ丸石垣の線に接続し、出土石垣57尺の規模と一致していることが判明した。石垣の地表からの立ち上がりは、部位によって異なるが4尺5寸から5尺である。土層勾配は6寸5分から7寸5分ほどと思われる。

三ノ丸石垣は、築城時に三ノ丸平場の拡張と台場を含む土塁の造成のため、傾斜地の土留めのために築かれた。福山館時代に、この地域は家臣屋敷地と数馬門・寺町に通ずる道路があり、平場が狭く大松前川方向に傾斜していた地域であることが「松前自沖口至奉行所図」から判明する。また、発掘調査からも地山のローム層の傾斜が確認された。

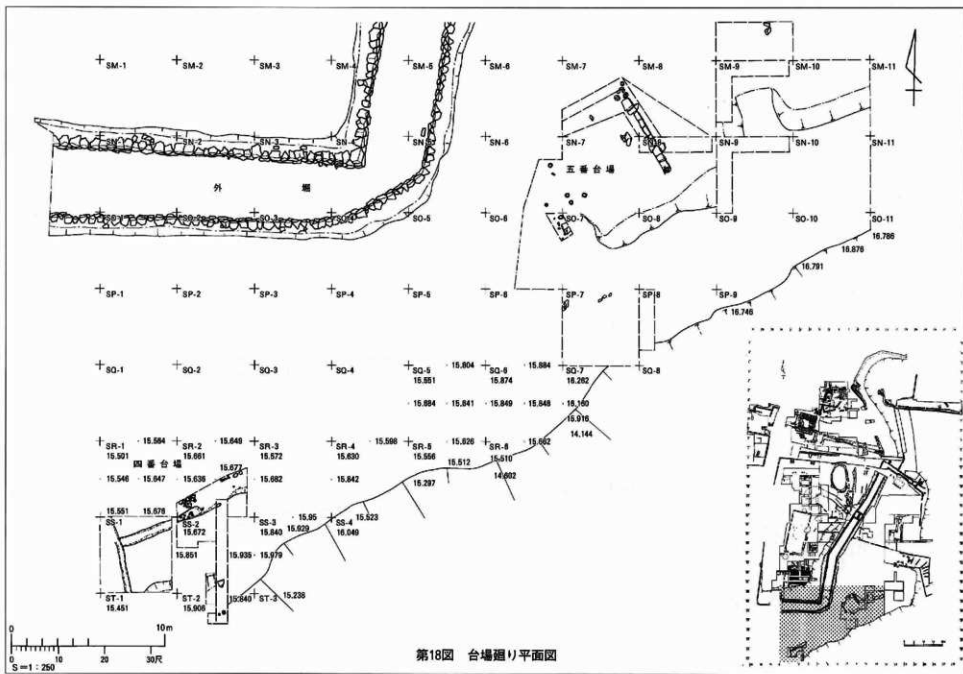
石積み状況(第17図)：1尺から1尺5寸ほどの小形の石垣石を積み上げている。石垣天端はやや乱れがあるものの概ね揃っている。SDラインでの欠落は、ここにイタヤカエデの大木があり、その幹根によって実測ができなかった。積み方は概ね落とし積みで、SEポイント付近を最後に積み上げていることが、石垣石の肩の傾きから判る。築城後の永い年月と、城取り壊し後さらに石垣上に盛られた盛り土との土圧により、谷間にハラミが認められるので、築城時の石積み勾配は判らない。恐らくは外堀の落とし口の石積み勾配と同様の勾配であったものと思われる。

土層堆積状況(第17図)：SE-12~15までのセクション図で、石垣の上部についての福山城築城に関わる土層は、土層19~60)までと思われる。また、石垣の下部については、築城時の土層は土層14~16.48)である。さらに、築城以前の福山館時代の土層は土層61.62)で、平場については削平され、斜面については削り落されたものと考えられる。城取り壊し時には土塁が削平され、土層3~18)が堆積した。



第16図 東郭土居詳細セクション図





第18図 台場廻り平面図

5) 五番台場・四番台場

(E.W.五番台場石垣下場27尺)

○抄録

五番台場は発見したが、四番台場については想定される場所を調査したが発見するに至らなかった。発見した五番台場の幅は、石垣下場で27尺あり、見分図の「二間四尺」26尺より1尺長い。

台場廻り平面図(第16図)

五番台場・四番台場付近の現況の地形と位置関係を示した。五番台場については台場石垣根石が発見された。また、この五番台場の周辺は土塁が比較的良く保存されていた。四番台場付近は土塁が削平され斜面に落とされている状況が調査地の土層堆積状況から判った。慶応3年に撮影された写真からも、三ノ丸の土塁はほぼ同じ高さで外周している状況が看取できる。したがって、この地域の土塁は明治8年以降に民有地として払い下げられた後に、削平されたものと考えられる。

五番台場

平面図(第19図)：土塁の残存部で天端の標高が17.2mあり、また築城時の平場の標高は15.3mであり、この比高差は1.9m程ある。台場石垣は北東面に10石と南西面に3石が確認された。また、北西面は根掘り跡があり、根石まで抜き取られていた。さらに南東側は土居にすりつき、石垣は構築されなかった。

セクション図(第20図)：土塁の遺構に対し直角方向ではないが、土層の堆積状況を示す。

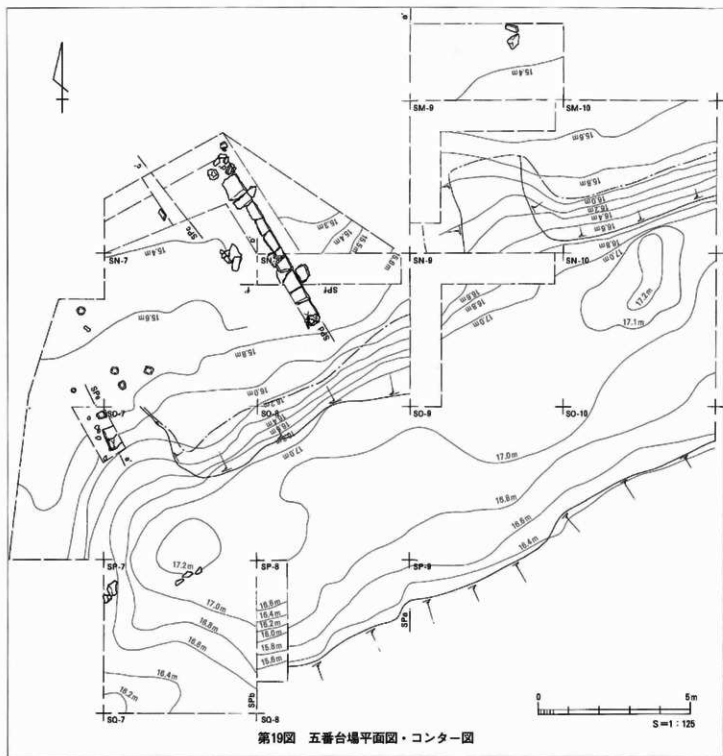
SPe-a'は、土層1~4)までが城取り壊し以降の盛り土である。土層4)の下面に築城時平場の地表面があり、ロームの地山面である。旧地表面の標高は15.3m付近である。土層5,7,8)は、築城時に外堀を掘削した際の排出土で、土層8)には石垣石を加工した際の剥片も含まれている。

SPb-b'は土層1,2)が城取り壊し以降の盛り土で、土層3)は築城時の表土である。土層3)以下は築城時の盛り土で、築城時に外堀を掘削した際の排出土が堆積する。土層6)以下は築城以前の旧表土面で、福山館時代に上級家臣の邸宅があったレベルである。現状では、土塁頂部の幅は15尺程と思われるが、正確な幅は不明である。また、土塁の頂部は削平されているものと思われ、現況での比高差が1.9m程であるがこれ以上比高差があったものと思われる。また、土塁の法下は縁石等の見切りを示す遺構の痕跡は認められなかった。

SPc-c'は台場石垣の北西面の石垣抜き取り部の土層堆積状況を示す。土層1)は、石垣根石抜き取り後に堆積したもので、土層3)は城取り壊し以降の盛り土で土層4)は築城時の盛り土である。土層5)は石垣の累石である。

SPd-d'、SPe-e'は石垣根石の姿図である。SPe-e'の掘り下げ面は築城時地表面であり、標高15.3m程である。

SPf-f'は台場石垣北東面の土層堆積状況である。土層5)の上面が築城時の表土

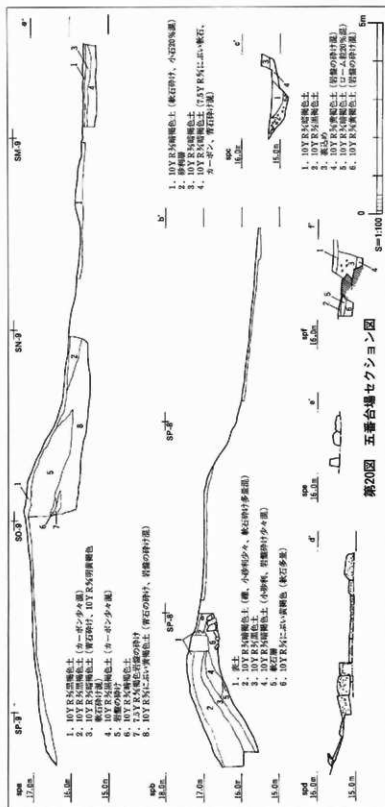


面で、土層3) が石垣裏込め渠石である。

四番台場

四番台場の想定される位置を調査したが、根掘り跡と思われる溝が、崖面に添って検出された。また、これと直交する溝も確認された。

平面図(第21図)：A溝はB溝に切られておりB溝の方が新しい。A溝は幅2尺長さ18尺5寸が確認された。SS-2Grid付近の溝底面には櫛列を示す柱穴跡が認められた。B溝はA溝に対して直交し外堀側に延びていた。この両方の溝に仕切られた



崖側(南東側)は、マウンド状に盛り上がっている。なお、これらの遺構はすべて築城時盛り土上にあり、築城時以降、おそらく城取り壊し後に構築されたものと思われる。

セクション図(第21図):SPA-a'は、土層部分の土層堆積状況を示す。土層1~7)までは城取り堀し以降の盛り土である。土層32)は福山館時代の表土である。土層28~31)の上面が築城直前の嘉永年間の地表面と思われる。この地表面の標高は13.9~14.65mである。土層8,18)が築城時代の土塁法面と思われる。また、土層8~27)までの土層にはほとんど遺物が含まれておらず、短期間に盛り土された状況が窺える。さらに、この盛り土天端の土層堆積状況から上面が削平されたものと思われるが、現況の天端標高15.55mよりそれほど高くも位置に天端があったものと思われる。なお、セクション図のa'Pointより南側は急激な崖地となっている。

SPb-b'は土層8)が城取り壊し以降の堆積砂利で、土層9, 10)が築城時堆積土層である。なお、この土層は、SPA-a'の土層26)の上面に乗る。セクション図に見られる木柵は、城取り壊し以降の盛り土を掘り構築されている。土層3)は木柵を設置してから堆積した土層である。

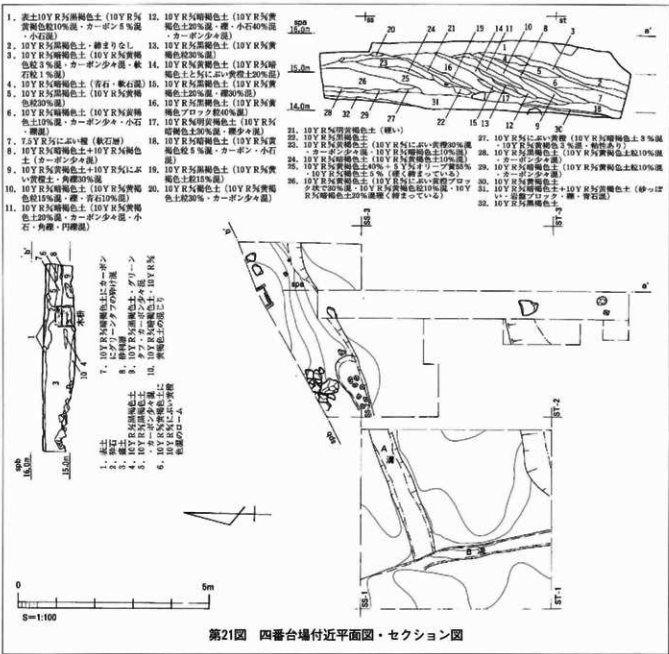
6) 遺構小括

○二重太鼓槽廻り



今年度の調査で基壇天端高が標高20.40m以上であることが判明した。これは土居天端の敷石（土台石の栗石）の一部と思われる平石が出土したことによる。この上部にさらに隅槽で発見されたようなグリーンタフの土台石が乗り、さらに花崗岩切石の縁石があって槽建物がのるものと想定される。したがってグリーンタフの土台石までが1〜2尺と思われ、花崗岩切石の縁石の高さが1尺であるので、確認された標高より2〜3尺で太鼓槽建物が乗るものと予想される。

大鼓櫓周辺の土居高は、基壇の北側際では、標高20.25m付近であることが判明し、櫓土台石との比高差は2尺5寸ほどと予想される。また、基壇の西側ではかなりの部分が削平されており、土居標高を推定可能な第9図SPI-I'部分で標高が19.6



第21図 四番台場付近平面図・セクション図

m程であるので、槽台際より2尺ほどさがる。

槽台の基壇は、掘り込み地業を行い、ローム地山面まで掘り下げた後、礫などを築城以前の旧地表面より高く積み上げている。また、この旧地表面から地山ロームまでは17世紀代からの盛り土層であることが今回の調査で再確認され、出土遺物も木製品を主体に多量に発見された。

○隅槽掘り

隅槽の土台石を発見し、そのハツリ面から槽周縁の表土面の標高が22.65m付近にあることが判明した。また、掘手門表平場の標高が21.9～22.0m程であるのでその比高差は2尺～2尺5寸、場合によっては3尺ほどが考えられる。さらに石製暗渠の天端の標高が22.0mであるので、平場の標高はこれよりやや下がるものと思われる。城取り壊し後暗渠部は陥没した。平場の多くの部分は標高22m程で、木製枘の周辺では枘に雨水が流れ込むように、地表面の勾配が認められる。

暗渠排水の排出口は、東郭石垣にあり、石垣中段から放出される。

○東郭石垣

今回の調査によって東郭全体の石垣を確認したことになる。また、部分的な確認調査で土居勾配も判明した。

2. 出土遺物

今年度の調査で出土した遺物の点数は12,865点で別表(表1)にその内訳を示した。このうち、石垣裏込め(海砂利)などから出土した、表面が摩滅した陶磁器は3,371点あり、遺構や遺物包含層から出土した遺物が9,494点である。以下、主な特色を表に示す。

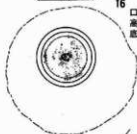
第2表 図示遺物観察表

図版番号	出土地区	器種	種別	産地	年代	文様・その他
22-1	SJ-1	杯	磁器	肥前	17世紀後半～18世紀	染付、口縁：水平削り口縁・端反り・型押し、高台縁過幅、館期盛り土最下層
22-2	SJ-1	杯	磁器	肥前	17世紀後半～18世紀初	染付、口縁：端反り、館期盛り土最下層
22-3	H-4	杯	磁器	肥前系	18世紀代	染付、見込が内厚、館期SX-3覆土
22-4	H-4	碗	磁器	肥前系	18世紀代	染付、見込が内厚、館期SX-3覆土
22-5	SJ-1	碗	磁器	肥前	18世紀前半	型紙摺、染付、「大明年製」磨れ跡、館期盛り土最下層
22-6	SJ-1	碗	磁器	肥前	18世紀代	染付、「大明年製」磨れ跡、館期盛り土最下層
22-7	H-4	碗	磁器	肥前	18世紀代後半	染付、「金」館期SX-3覆土
22-8	H-4	碗	磁器	肥前	18世紀後半	染付、館期SX-3覆土
22-9	SJ-1	碗	磁器	肥前	18世紀前半	染付、型紙摺、館期盛り土最下層
22-10	D-9	湯飲み	磁器		幕末・明治	染付、東郭石垣
22-11	SJ-1	碗	陶器		18世紀代	透明釉、貫入、館期盛り土最下層
22-12	H-4	灯明皿	素焼き		18世紀代	回転糸切り底、館期盛り土最下層
22-13	SJ-1	皿	陶器	唐津系	17世紀後半～18世紀前半	青緑釉、見込蛇ノ目輪ハギ、砂目、館期盛り土最下層
22-14	H-4	灯明皿	素焼き		18世紀代	内面透明釉、回転糸切り底、館期SX-3覆土
22-15	SJ-1	皿	磁器	肥前	18世紀前半	色絵、口縁端反り、見込蛇ノ目輪ハギ、見込に赤絵で五弁花、館期盛り土最下層
23-16	SJ-1	碗	陶器	唐津	17世紀後半～18世紀前半	刷毛目、見込蛇ノ目輪ハギ、高台無輪、館期盛り土最下層
23-17	SH-3	碗	陶器	唐津系	18世紀代	刷毛目、見込蛇ノ目輪ハギ、高台：施釉・アルミナ砂付着、ニノ丸土居
23-18	D-9	皿	陶器	関西系	幕末・明治	高台縁を除き全釉、透明釉、模様は釉薬の掻き取り、東郭石垣
23-19	SH-3	皿	磁器	肥前	17世紀後半～18世紀前半	染付け、見込蛇ノ目輪ハギ、高台無輪、ニノ丸土居
23-20	I-4	壺	陶器	信楽	幕末・明治	福山城跡略掘
23-21	C-7	皿	陶器	瀬・美	江戸後期	鉄絵、馬の目皿、東郭石垣
23-22	SH-3	皿	磁器		幕末・明治	白磁、菊花文、型押し、レリーフ、釉質はややコバルト味がある。ニノ丸土居
23-23	SC-14	瓶	磁器		幕末・明治	染付、口縁、輪郭がコバルトがかっている。三ノ丸石垣
24-24	I-4	惣利	陶器		幕末	福山城跡略掘出土
24-25	SS-2	灰伊	素焼き		幕末	口縁と外面に透明釉、三ノ丸土居
24-26	H-7	壺	陶器		幕末・明治	隣槽
24-27	SS-2	瓶	陶器		幕末・明治	三ノ丸土居
24-28	SJ-1	摺鉢	陶器	唐津系		館期盛り土最下層
24-29		瓶	素焼き		明治・大正	外面は銀箔押し、内面は鉄釉





16
口径 13.0cm
高さ 4.1cm
底径 4.6cm



17
口径 ()
高さ ()
底径 4.8cm



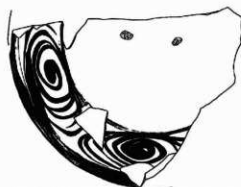
18
口径 17.1cm
高さ 2.6cm
底径 5.4cm



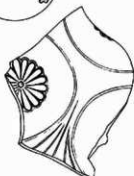
20
口径 7.2cm
高さ 9.7cm
底径 7.3cm



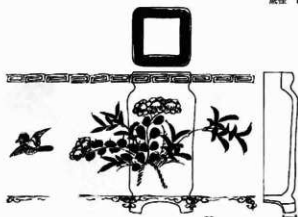
19
口径 (12.4cm)
高さ 3.3cm
底径 3.8cm



21
口径 (23.4cm)
高さ 4.5cm
底径 11.2cm



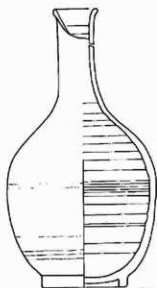
22
口径 ()
高さ ()
底径 9.6cm



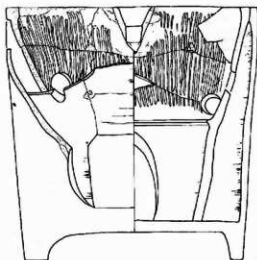
23
口径 4.5cm
高さ 11.1cm
底径 5.0cm

第23図 出土遺物 皿・鉢他 (16~23)

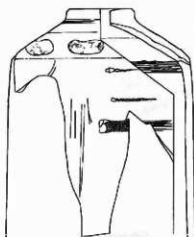
0 10cm



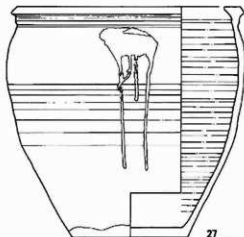
24
口径 (3.3cm)
高さ 21.8cm
底径 6.6cm



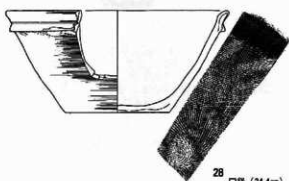
25
口径 (19.8cm)
高さ 19.8cm
底径 17.2cm



26
口径 (9.6cm)
高さ ()
底径 ()



27
口径 34.9cm
高さ 36.1cm
底径 18.0cm

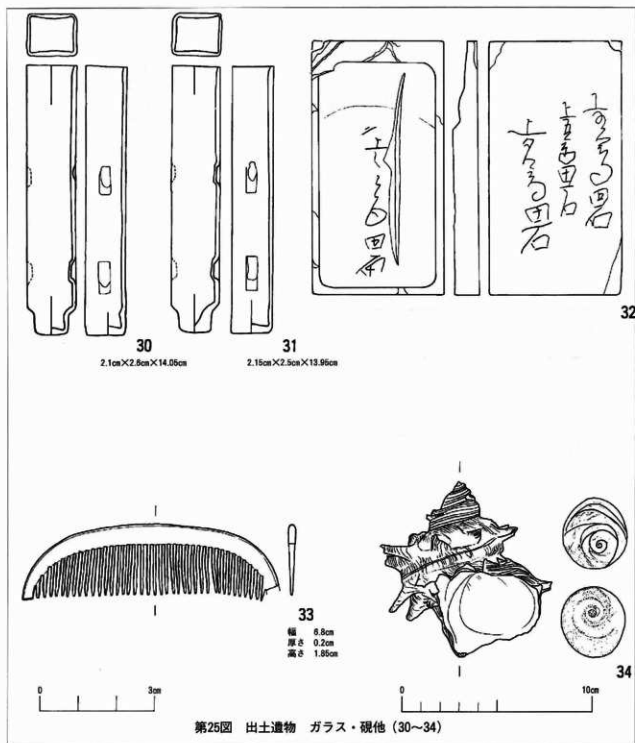


28
口径 (34.4cm)
高さ 15.9cm
底径 16.2cm

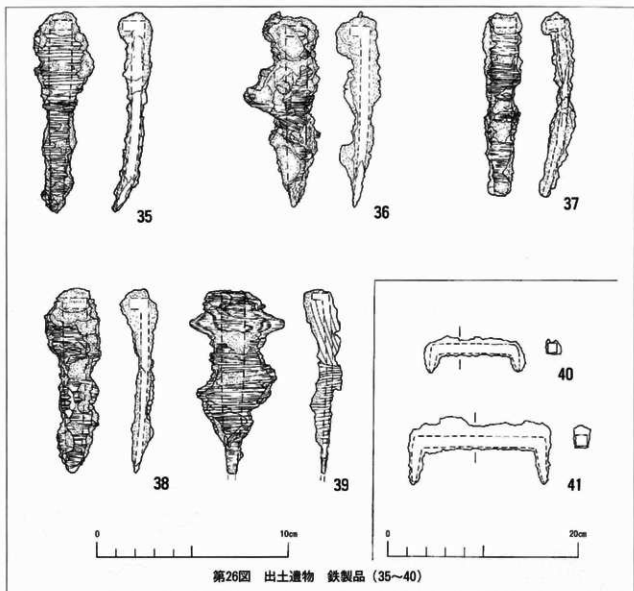


29
口径 10.1cm
高さ 28.7cm
底径 11.1cm

第24図 出土遺物 徳利他 (24~29)

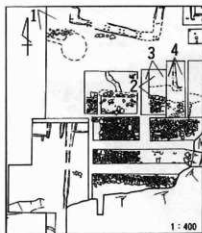


図版番号	出土地区	器種	種別	産地	年代	文様・その他
25-30	SC-14		ガラス		明治・大正	型の合わせ目が認められない。気泡が多い。三ノ丸石皿
25-31	SC-14		ガラス		明治・大正	30と全く同じ型。型の合わせ目が認められない。気泡が多い。三ノ丸石皿
25-32	SH-3	硯	スレート	近江	幕末	「本高島田石」の銘が裏面にある。二ノ丸土器
25-33	E-5	簪	亀甲			
25-34	SO-10	サザエ	巻き貝	松前	幕末・明治	現在、松前小島に産出し、サザエの北限地。三ノ丸土器



図版番号	出土地区	器 種	規 格 (長×幅×厚)	年 代	そ の 他
26-35	I-5	船釘	(202)×(24)×(12)mm	嘉永年間	福山城期石製暗渠上部の横板の止め釘。
26-36	I-5	船釘	(188)×(24)×(12)mm	嘉永年間	*
26-37	I-5	船釘	(188)×(24)×(9)mm	嘉永年間	*
26-38	I-5	船釘	(186)×(26)×(9)mm	嘉永年間	*
26-39	I-5	船釘	(188)×(24)×(9)mm	嘉永年間	*
26-40	H-4	鏡	(98)×(10)×(10)mm	文化・文政以前	館野SX-3覆土
26-41	H-4	鏡	(142)×(12)×(12)mm	文化・文政以前	*

写真図版



1
調査前の状況。シートは平成6年
度調査部分。



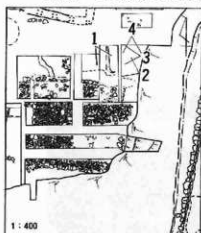
2
右手の大型の礫は、基壇地盤下層
部積み上げ礫の最上部。断面に上
部地盤の砂利が挟まっている状況
が判る。



3
2よりもう一段掘り下げると、基
壇地盤下層部の密まわりに砂利を
敷いている。4も同様。



図版 2 二重太鼓櫓基壇 (2)



1

右上方にある平石が櫓上台石の根石と考えられる。断面は上部地盤と櫓北側土層の土層堆積状況。トレンチ底面は福山館期（嘉永以前）の地表面である。



2

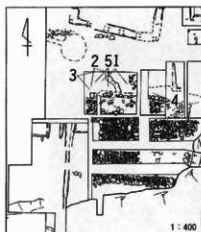
土層断面は土居盛り土の堆積状況。右手前の柱穴は福山館期（嘉永以前）の櫓列跡。櫓のまわりには砂利が敷かれていた。



3

2の拡大。土層の天端と福山館期の地表面が判る。4は櫓列の全体で柱穴のプランは円形。





1
SJ-1Gridにおける福山館期盛り土（嘉永以前）の調査。手前の長方形の平場面が築城直前の生活面。奥の基壇下層部地業は、この盛り土を掘り込み、生活面より高く礎を積み上げ、その裾（段差部）は4の様に砂利を三角堆積させている。



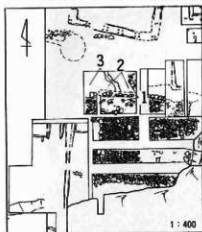
2
盛り土内下層部の遺物出土状況。奥は基壇下層部地業。



3
福山館初期（17世紀前半）の生活面は、地山ローンを削り出して造成していたと思われる。5は基壇下層部地業の西面。



図版 4 二重太鼓櫓基壇 (4)



1

盛り土最下層遺物出土状況。出土した陶磁器の時期は17世紀後半から18世紀前半。



2

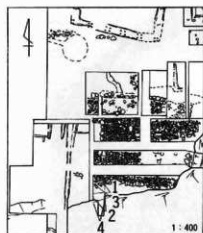
曲物等日常的な生活用具と建築廃材（瓦等）そして割れた陶磁器がほとんどで、盛り物は碗・盆などが僅く少量出土した。



3

最下層調査状況。人と比べ基壇下層部地盤の硬の大きさが判る。





1

SL-1Gridのトレンチセクション。
右側は基壇の下層部地業の礫。左
側は中位下が嘉永以前の盛り土。



2

左側は中位の砂利層が築城時の表
土で、下層部地業はこの面からロー
ム地山まで掘り込み、礫を積み上
げている。

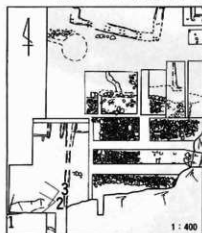


3

2の嘉永以前の盛り土を正面から
見る。4は地業掘り込み。



図版 6 二重太鼓櫓西側土居 (1)



1

表土を剥いだ段階で礫が散在していた。すでに天端は削平されていた。



2

この法面以下が築城時のものと思われる。明治8年までに削られた結果この形になった。散在する礫は土層地盤栗石の可能性が考えられる。



3

L字形の溝は近代の土台掘りである。





1
セクションに見える土層は明治8
年以降に堆積したもの。



2
中位以下は嘉永参城以前の堆積土。



3
中位の黒色土の堆積が嘉永参城以
前の表土で、その上位が参城時堆
積土。なお、左側に見える明るい
三角堆積土より上位は明治8年以
降の堆積土。



図版 8 二重太鼓櫓西側暗渠 (1)



1

中央2本の溝のうち左側は二重太鼓櫓基壇石垣の根掘り。右側は近代の住宅基礎の根掘り。



2

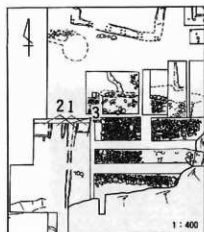
暗渠のプランを確認した状況で、この面が嘉永築城以前の生活面。円形の礎は建物礎石で、おそらく既守兵屋のものと思われる。



3

暗渠の基礎間隔は内々で4尺、芯々で5尺ある。





1

3 本認められる溝のうち中央は太鼓櫓基礎石垣の根掘り、両側が嘉永築城以前の木製暗渠。埋設間隔は内々で4尺、芯々で5尺ある。



2

図版 8-3 と同じ。中央に木製橋が出土した。橋の規模は幅が1尺3寸で長さが現存で1尺7寸、深さが約1尺である。

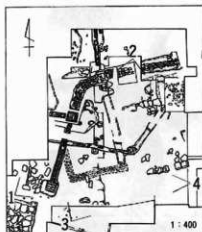


3

太鼓櫓基礎石垣の根掘りと暗渠のセクション。



図版10 隅櫓 (1)



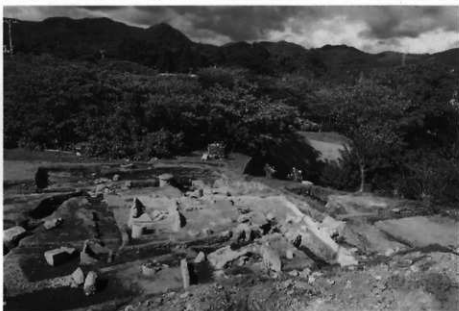
1
調査前の状況。バックホーで表土の砂利を削いだところ。

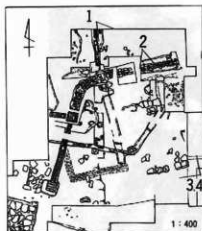


2
調査状況。近代の遺構の隙間から近世の遺構を調査する。



3. 4
調査終了状況。





1

隅櫓周辺。手前マンホールの下に築城時暗渠が埋設されていた。中央奥に隅櫓土台石垣が一部残存していた。



2

隅櫓土台石垣は南面と北面の根石部分がそれぞれ一部残っていたが、天端は不明である。なお、土台石垣の根掘りは浅く、石垣石の下に栗石はほとんど詰められておらず、根掘り底に直に置かれていた。

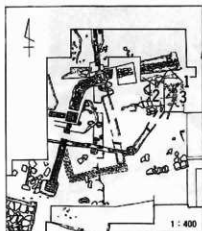


3. 4

隅櫓土台石垣の南東隅が検出され、桁行26尺であることが判明した。梁間北西隅に根掘りがあり、約19尺と思われる。



図版12 隅櫓 (3)



1

北側の隅櫓土台石垣と暗渠。中央正面のセクションに見える土層は築城時の盛り土である。



2

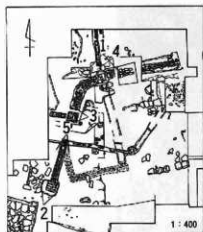
トレンチ中位にある暗渠のプラン確認面が築城以前の生活面で、この場所は絵図などから館の外側にある道路跡と考えられる。暗渠遺構は道路跡の地山ローンを切って掘り込まれており、築城時に構築したことが判る。



3

隅櫓基境内に木製暗渠が検出され、更に西側に続いていた。これは築城時暗渠の上部に構築されていたことから、明治以降と判明した。





1

奥に木製の枡1。2、中央手前は石製枡があり、隔槽を廻り埋設されている。



2

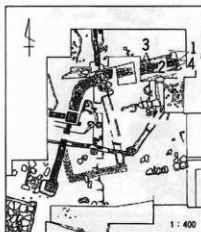
枡2で、搦手門槽台裏の溜水をうける。4は暗渠調査前のプラン確認状況。右側縦方向の窪み。



3

枡1で、左側は花崗岩土台石。4は枡1～枡2間の暗渠木製蓋。





1

枡3石製枡から東郭石垣間の暗渠
検出状況。右側のセクション際に
ローム地山が見え、これを掘り込
んで暗渠が構築される。



2

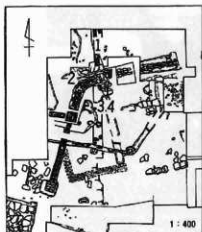
暗渠のセクション拡大。排水溝石
組の周外に沿って側板をあて、木
蓋をする。木蓋は側板に対し横に
渡し蓋とする。側板は4寸角の木
材を2本、船釘でつなぎ合わせ使
用している。



3

船釘は7~8寸間隔に打たれる。
4は枡3石製枡から東郭石垣間の
暗渠全景。





1

左側に排水し、他の三面から水を
うける。内法はほぼ2尺5寸四方
で、深さは最大で3尺4寸。



2

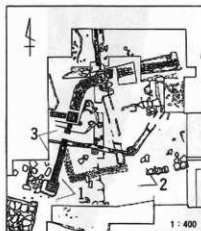
東面にある排水のための開口部。



3. 4

石段下の暗渠。石段および隣接の
乗る土居内側の石垣根掘りに連る
雨水を砂利を介して受ける。





1

柵2の検出状況。石垣石が入り込んでいる。



2

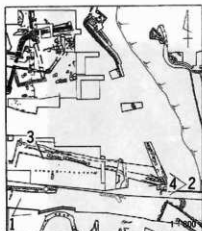
中央コの字に砂利敷きが認められ、絵図から福山館期土居石垣根掘りと考えられる。根掘り幅は2尺から2尺5寸で、福山城の土居根掘りの幅は4～5尺であり、規模が全く異なる。



3

福山館期土居石垣根掘りは、福山城期暗渠に切られている。福山城期生活面からはこの根掘りの玉砂利上面はロームが吸られ判らなかつたが、ローム表面の土の乾き具合からこの道構を検出した。





1
調査前の状況。



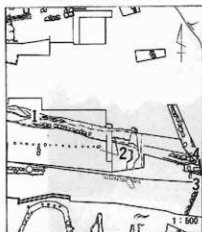
2
調査終了状況。左側のマウンドが
三本松土居遺構で、中央やや右側
の平場が福山城期の地表面である。



3、4
調査終了状況。石垣根石が部分的
に残っていた。枕列は明治8年以
降である。



図版18 東郭石垣 (2)



1

裏込め堆積状況。裏込め砂利にはかなり土が混ざる。



2

石垣掘り方。石垣裏側のこの部分では中位に福山館期地表面がある。

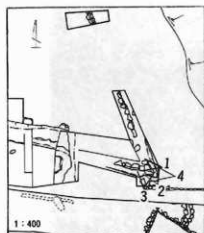


4

3. 4

南東隅先端部を掘出したことによって南面の石垣延長が105尺であることが判明した。





1

南東隅先端部石垣装込めは、玉砂利が用いられているが、このように、石垣石の加工跡を詰めているところもある。

2

右側の根掘りにまたがる土層観察のための坪の上面が福山城期の地表面である。根掘りは地山の岩盤を掘り込み栗石（玉砂利）を入れ根石を据える。

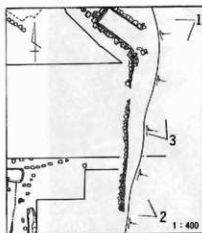


3

先端部上部の面のハツリのある部分までが地表に露出していたと考えられる。4は人との比較。



図版20 ミノ丸石垣



1

調査前の状況。



2

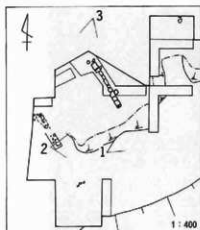
天端があり、福山城跡の地表面からの立ち上がりは6尺で、外堀落とし口かどからの延長は、57尺あり、松前神社所蔵絵図と延長が一致した。



3

永年の土圧と植物の根によりハラミヤ石垣の欠落を生じている。





1

調査前の状況。土塁天端の平場が良く保存されていることが判る。



2

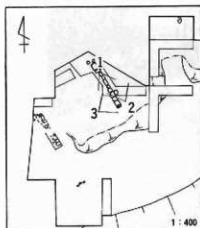
土塁内部の盛り土は外堀の掘り上げ土が使用されている。表面に見える跡は、外堀を掘った際の地山岩盤の砕け石である。



3

台場は石垣で囲まれた基壇状をなす。その石垣根石を検出し、一辺が下場で27尺あった。





1

板石出土状況。裏込めの玉砂利が
しっかり入っている。



2

左側奥のトレンチ底面が福山城附
地表面で標高15.3mである。



3

右側土層観察時に石垣石の抜き取
り状況が判る。





(1~6)



(7~11)



(12~15)



(16~19)

図版24 出土遺物 (2)



(20—23)



(24、25)



(26)



(27)



(28、29)



(30~34)



(35~41)

報告書抄録

ふりがな	しせきふくやまじょう							
書名	史跡福山城Ⅻ							
副書名	平成7年度発掘調査概要報告							
巻次								
シリーズ名								
シリーズ番号	Ⅻ							
編集者名	前田正憲							
編集機関	松前町教育委員会							
所在地	北海道松前郡松前町字神明30番地						TEL. 01394-2-3060	
発行年月日	平成8(1996)年3月30日							
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コ ー ド		北緯 °' "	東経 °' "	調査期間	調査面積 ㎡	調 査 原 因
		市町村	遺跡番号					
しせきふくやまじょう 史跡福山城	ほつまいどうまつまゐ 北海道松前 郡松前町字 まつしろ 松城	01331	B-02-53	41度 25分 38秒	140度 6分 41秒	19950605 ～19951103	1,095	史跡整備事業
所収遺跡名	種 別	主な時代	主 な 遺 構		主 な 遺 物		特 記 事 項	
史跡福山城	城跡	幕末	二重太鼓櫓・隅櫓・ 東郭石垣・三ノ丸石 垣・五番台場		16世紀～幕末陶磁器 縄文土器石器		一部福山館期の 遺構も発見され ている。	

史跡 福 山 城 XII

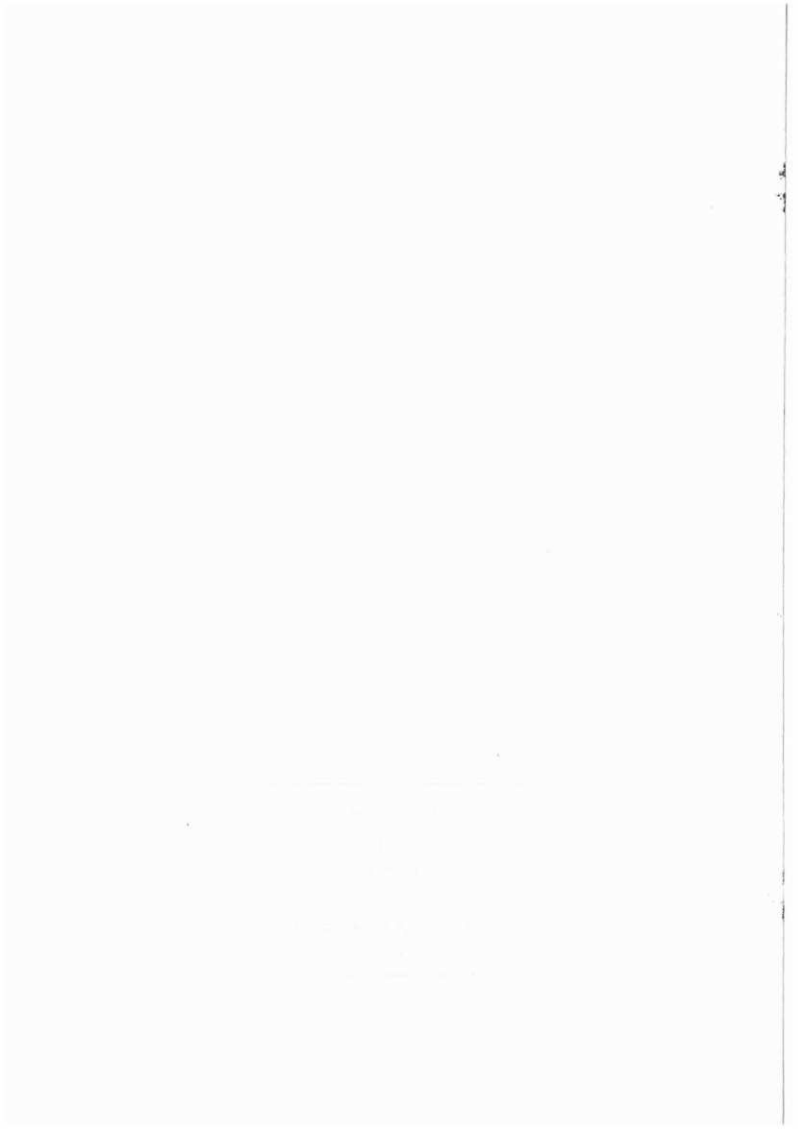
平成7年度

発掘調査概要報告

発 行：平成8年3月30日

発行者：北海道松前町教育委員会

印 刷：カジャ印刷



史跡福山城ⅩⅢ
平成 7 年度 発掘調査概要報告
電子版

2025 年 1 月 31 日 第 1 刷

発行者 北海道松前町教育委員会

〒049-1594 北海道松前郡松前町字神明 30

TEL:0139-42-3060 / FAX:0139-42-2211

WEB:<https://www.town.matsumae.hokkaido.jp/bunkazai/>

MAIL:bunkazai@town.matsumae.hokkaido.jp

底本：史跡福山城ⅩⅢ 平成 7 年度 発掘調査報告書
(1996 年 北海道松前町教育委員会発行)

この電子書籍は閲覧を目的としているため、不鮮明な図版や誤字が含まれる場合があります。必要に応じて、お近くの図書館等で底本をご利用ください。